

「スポーツ選手の食の報道から読み取れるジェンダー問題」
「The gender problem which can be read in the report about a sports player's diet」

1k09b155-5

西本美緒

指導教員 主査リー・トンプソン 先生

副査 寒川 先生

【目的】

メディアリテラシーを学んでいくなかで送り手の影響を受け手が無意識に受けているという現状に非常に大きな危機感を抱き、そして特にその中でもジェンダーに関わる考え方というのはかなり見えない形で我々の日常行動に影響を与えているように感じた。そんななか私自身が個人的に興味のある「食」についても氾濫した情報に消費者が振り回されている現状からメディアリテラシーの重要性を感じた。そこで広範に及ぶイデオロギー的メッセージを意識下に浸透させるには理想的な状況であるとされているスポーツ報道の中から、特に食生活に関する報道に絞ってジェンダー問題をあぶりだすために、本研究のテーマとして「スポーツ選手の食に関する報道から読み取れるジェンダー問題」と設定した。

【方法】

本調査では朝日新聞の聞蔵Ⅱビジュアル（朝日新聞オンライン記事データベース）と、読売新聞のヨミダス歴史館を使って内容分析をした。両新聞（朝日新聞 読売新聞）の1986年から2012年において、「食生活&選手」で検索し、ヒットした件数の全てを内容分析する。内容分析の際は自身で作成したコーディングシートを用いた。明らかに「食生活&選手」というワードでの検索でヒットしたものうち、両ワードの関連性がないもの、また今回の卒業研究の主旨しそぐわないものに関しては✕で処理をした残りの該当記事をいくつかの分類で整理した。その分類の仕方はまず自身の食生活について記事で触れられてる選手の性別を比較し、そのあと食生活に関するサポートがあった選手の場合男性選手、女性選手それぞれに分けてサポート者の性別を比較した。またサポート者が家族なのか専門家（栄養士など）なのか専門家以外（監督・コーチなど）なのかによっても分類し比較した。

【結果】

性別別に見ると、両新聞とも「選手&食生活」のキーワードでの内容分析では圧倒的に男性の記事の方が多かった。全男性選手の記事と全女性選手の記事において、サポート無しの記事の割合は女性の方が多かった。つまり男性選手の方が食生活においてサポートを受けている割合が高かったということであ

る。そしてその中でも男性選手へサポートをする者の性別は女性の割合の方が高かった。（女性選手へのサポート者の性別は判別不可者が最も高かった）サポートをする者の内訳では、男性選手への男性からのサポートでは専門家以外（監督、コーチなど）が圧倒的に多いのに対し、男性選手への女性からのサポートでは家族系（母親、妻）が最も多かった。選手自身の性別に関わらず、サポートする者の性別だけを集計すると、女性によるサポートが最も多かった。サポートする者の性別に関わらず、内訳だけを集計したものからは、男性選手へのサポートのほうが、女性選手へのサポートよりも家族系からのサポートが多かった。

【考察】

調査の結果、仮説通りスポーツ選手の食生活を表す記事は男性選手の記事では女性、とりわけ母親や家族の登場が多いことが証明された。メディアによって作り出されるジェンダーは男性と女性の役割を限定ししばしば「男性らしさ」「女性らしさ」を限定する傾向にある。近年では女性の社会進出が以前よりもはるかに活発になっているが、それでもなお、まだまだ「男性は〇〇」「女性は〇〇」という画一的な風潮はぬぐい去れていないように感じた。男性選手は自身のスキルアップ、目標の達成（勝利を手に入れるなど）という活動の主体になるのに対し、女性はその男性選手の活動のサポートに徹することこそが素晴らしいと考えられやすい傾向にあるといえるだろう。ジェンダー問題の中で私が最も脅威であると感じることは人々の中の「無意識さ」である。長い間ジェンダーというものが自然と存在している{ように見えてきた}我々にとってジェンダー問題というのは意識しないと見えないものであるように思う。今回の内容分析で使用した記事も普段何気なく読んでいたらなんの違和感もなく読み進めることが可能だった、そしてこのような状態が我々の日常生活のなかにはたくさんはびこっているのだ。我々ができることは、本研究で用いた新聞をはじめとしたCM、TV、雑誌などのメディアの表現に対して意識的になり、敏感になり、必要であれば積極的に検証することであろう。